

右衛門兩人普請奉行を命ぜらるゝを起本とすと云ふ。按ずるに、普請會所はそのさき蓮池の續に在りたるならん。今の普請會所の地に定るも亦其の年月不可考とあり。湯淺祇庸の藩國官職通考に云ふ。普請奉行其の始め未詳。世傳に云ふ。當職古は人持組より勤むと云ふ。按ずるに、當時造營方主附の如く、臨時其奉行に人持組の人々へ特命ありたりけん、伊藤内膳等勤めたる由見ゆ。元和六年大坂城普請、萬治元年江戸天主臺或は尾張那古屋城普請手傳等の時は、皆惣奉行は國老・執政の人々を命ぜらる。其時機に因ての事也と推察すべし。後の普請奉行は寛文以來四人宛有之と見ゆ。元祿年中より三人宛なり。といへり。平次按ずるに、普請奉行の名は、既に藩祖利家卿の時御普請奉行宮川與左衛門を云々といふこと、村井長明の陳善錄に見ゆ、寛永四年士帳に、御普請奉行千石鈴木孫左衛門・千石別所勘右衛門・五百石松田太郎兵衛と記載す。右名前にて考ふるに、普請奉行とて定役となし置かれたるも、藩祖利家卿國初以來の事なりと聞ゆ。然らば三州志に、慶安元年宮崎太左衛門・熊谷久右衛門兩人を被命を起本といふは非也。又藩國官職

通考の説も請けがたし。扱明治二年藩主從三位慶寧卿封土を奉還し、城内を退去せしに付き、城中の普請方も廢止せられ、普請奉行等をば免除せらる。故に普請會所も不要と成る。其の頃接賢館と改稱し、諸藩遊歴の士族に應接し、傍ら新書翰を衆人に翻閱さする所となし、英人オースボン爰に居せしを、其の後神護寺の致遠館を移し、明治四年東方眞平へ貸渡しに相成り、翌年の春同人大聖寺へ歸り、明家となるを、同六年八月共立社とすといへり。

○普請役來歴

普請の名目は、文安元年に撰びたる下學集に、普請諸人・作事、故云普請者也。と見ゆ、いにしへ高僧の衆生を勤めて、橋梁を架くるをば橋普請と稱す。はその名目の起原にて、普請は勸化の意、元は佛家より出でたりといへり。續日本紀卷一文武天皇四年三月の道照和尚傳に、於後周遊天下。路傍穿井。諸津濟處備船造橋。乃山背國宇治橋。和尚之所創造者也。とある、是橋普請の見わたる起原ならんか。さて中古朝廷御衰微の頃、公家・武臣の諸庄園及び神社佛閣の領所等に割當して、禁裏造營の用途などを出さしむ

るを國役と云ふ。是則ち普請役なり。故に蜷川親元記に、寛正六年四月二日仙洞御造營の普請奉行といふ事見えたり。織田・豊臣家の頃普請方の事、信長記・太閤記等に見ゆ、徳川家に至り、慶長十五年の名護屋城普請、元和六年の大坂城普請などは、皆諸藩へ國役を以て割當し、塹を鑿ち石積を命ぜらる。吾が舊藩にも天正十七年利家卿の姪中川武藏守著つき、公儀普請役過分の未進有之由、普請奉行より注進す。利家卿公儀普請・軍役等は、武士の第一可勤所業也。それを疎略して自分の氣樂を第一とし、傍輩を倒す事盜賊に似たり。罪科輕からずと仰せられ、能登國津向といふ處へ配流せらると、三壺記に記載す。されば舊藩國初以來普請役をば諸士へ割當し、家祿高に應じ出さしめられし事知られけり。故に、文祿元年金澤の城廻りに塹を鑿ち、石垣を築かしめらるゝに依つて、戸室山より積石を伐り出す。是金澤城普請の起原ならんか。此の後慶長十五年に尾張名護屋の城普請を徳川家より命ぜられ、中納言利常卿出役し給ふ。留主中國老後原出羽守一孝餘閑あるを以て、諸士に課し、金澤城の外塹を掘らしむ。其の頃は普請役珍しきとて不日に

落成す。是を俗に侍普請と呼べりと、三州志等にいへり。さて其の普請役の定、國初は如何ありけむ。利常卿以來は、諸士の家祿草高百石に、普請役高一年分惣人數百二拾一人六分六厘とし、十ヶ日之内三ヶ日相勤むるにより、是を三步役といへり。但し大身は人役とて役人をば出し、小身は銀役とて銀子にて出す定なり。人役は杖足輕・役小者と稱し、普請會所へ出勤せしめ、普請奉行の指揮に従ひ、戸室山に至り城中入用の石を伐り出さしめ、城廻りの石垣等破壊の用に備ふ。是普請役の事務なりき。又穴生方とて石積の棟梁ありて、普請方の石積二十人・石切などの惣裁たり。穴生は江州穴生村より出でたる石工共にて、藩祖利家卿越前府中に在城し給ふ頃、穴生源助・小川長右衛門を召出され、石積の主裁となし給ふ。中にも穴生源助が子孫連綿して普請方を勤むと云ふ。故に後々までも石積の者共をば穴生方と呼べり。皆城普請方を専務となせり。さて今世人作事方をば普請と稱すれど、作事と普請とは格別なり。故に舊藩中は作事所と普請會所とは別所にて、奉行人は異なり。作事所は城中の作事向を初とし、凡て藩費を以て造營を命ぜらるゝ